

古川流域で進める総合的な治水対策



公益社団法人全国防災協会理事
秋田県秋田市長 穂積

もとむき
志

1. はじめに

この度、全国防災協会機関誌「防災」への寄稿の機会をいただきましたことに、感謝を申し上げます。

秋田市は、秋田県のほぼ中央に位置し、日本海に面しています。市の東部には出羽山地が連なり、日本海に注ぐ雄物川や市街地を貫流する旭川などの豊富な水資源をもたらす河川があり、水と緑にあふれた自然と調和する美しいまちとして、また、秋田県の経済や産業、文化・芸術などの中心的な役割を担い、中核市として成長してまいりました。

夏には、東北三大祭りの1つであり、約130万人が訪れる「秋田竿燈まつり」、平成28年にユネスコ無形文化遺産に登録された「土崎港曳山まつり」などの行事が催されます。今年は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、残念ながら中止となりましたが、市民や観光客の安全に配慮し、まつりの伝統を守りながら、新たなまつりの姿を模索しております（写真-1）。

2. 平成29、30年に発生した災害

平成29年7月、8月および30年5月、活発な前線の影響によって非常に激しい降雨により、本市を流



※H29.7洪水 国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所提供（仁井田地区）

写真-2

れる一級河川雄物川が氾濫するなど、多くの地域で浸水被害が発生しました（写真-2）。

平成29年7月豪雨で観測された24時間最大降水量は、雄和観測所で347mm（観測史上最大）、大正寺観測所で304mm（観測史上第3位）となるなど、記録的なものとなりました（表-1）。

また、翌8月の豪雨では、前月7月に比べ降水量は幾分少ないものの、平成8月1カ月の降水量の半



土崎港曳山まつり 7/20～21



秋田竿燈まつり 8/3～6

表-1 雨量データ

観測所	H29.7.22~23降水量		H29.8.24~25降水量		H30.5.17~19降水量	
	総雨量	24時間最大	総雨量	24時間最大	総雨量	24時間最大
秋田	127.0mm	127.0mm	102.5mm	102.5mm	208.0mm	156.5mm
仁別	179.0mm	174.5mm	154.0mm	153.0mm	223.5mm	148.0mm
雄和	348.5mm	347.0mm	122.5mm	121.5mm	213.0mm	156.5mm
大正寺	305.0mm	304.0mm	150.0mm	150.0mm	203.0mm	148.5mm
岩見三内	234.5mm	233.5mm	121.0mm	120.0mm	210.5mm	148.0mm

(気象庁のホームページから引用)

表-2 平成29年から平成30年の豪雨による秋田市内の浸水被害件数

	平成29年7月			平成29年8月			平成30年5月		
	床上	床下	計	床上	床下	計	床上	床下	計
被害件数	155	356	511	9	43	52	146	232	378



※H29.7洪水 国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所提供

写真-3

分強が1日で降りました。

さらに、翌年30年5月の豪雨は、秋田観測所において5月期としては観測史上最大となる156.5mmの雨量を記録し、雄物川の水位観測所でも5月期として戦後最大となる水位を観測するなど、近年は、降水量と同様に河川の水位も「観測史上最大」の記録が相次いでおります。

これらの豪雨によって、平成29年7月には511件、8月には52件、30年5月には378件など、市内の多くの地域で床上床下の浸水被害が発生しました(表-2、写真-3)。

僅か10か月の間に見舞われた3回の大水害は、市民に大きな衝撃を与え、豪雨のたびに家屋や農作物が被害を被り、その復旧には体力的にも、精神的にも大きな負担が強いられました。また、土砂崩れや

道路冠水の発生は市民生活と経済に大変大きな影響を及ぼしたことから、本市は、これらの対応を喫緊の最重要課題として位置づけ、対策に取り組むこととしました。

3. 雄物川河川激甚災害対策特別緊急事業

平成29年7月、8月の豪雨により、国は、管理する一級河川雄物川の氾濫で浸水被害にあった本市雄和地区を含む上中流域の復旧を「河川激甚災害対策特別緊急事業」と定めるとともに、翌年1月には、いわゆる激特事業の推進室を設置しました。

本市としても、令和4年度を完了とする激特事業の円滑な推進と一日も早い市民の安全安心の確保を目的とし、同事業に関する新たな担当を設置するなど、国と共に取り組みを進めております。



写真－4 平成29年7月の浸水状況/生活道路道路冠水/国道13号道路冠水



写真－5

4. 普通河川古川

古川は、本市の南部に位置し、一部は古川排水樋門から国が管理する雄物川へ、本流は秋田県が管理する猿田川（一級河川）へ合流する、主として農業用水・雨水排水を目的として整備された、本市が管理する普通河川（流域面積約11.0km²、流路総延長9.6km）です。

古川流域は急激な都市化が進み、水田・畑地が開発され住宅団地などの市街化が進展し、現在は約3万人が暮らす住宅地となっております。近年の豪雨では浸水被害が常襲しており、宅地化による保水力の低下や雨水流出量の増加が、その要因と考えられております。

平成15年には、国土交通省によって事業費6億5千万円を投じ古川排水樋門が改築され、浸水被害は軽減されたものの、近年、「観測史上最大」と言われる大雨が頻発していることもあり、古川流域ではいまだ多くの浸水被害が絶えません。

平成29年、30年の豪雨では、古川流域の生活道路

の多くが冠水したほか、交通の大動脈である国道13号も通行止めとなるなど、市民生活に大きな影響を与えたほか、市で発生した床上床下浸水被害の約5割が古川流域に集中しました（写真－4）。

このため、本市は河川改修事業、河道掘削、水位計の設置など、ハード・ソフトの両面から緊急の治水対策を実施しました（写真－5）。これにより一定の水位低下が図られたものの、抜本的な解消には至らなかったことから、より効果的な治水対策を行うことを目的に、古川と密接に関連する国や県と共に、総合的な治水対策を進めることとしました。

5. 古川流域の総合的な治水対策協議会の設立

平成30年8月17日、国・県・市の3者が協働で地域の安全と安心を図るため、総合的な治水対策を策定することを目的に「古川流域の総合的な治水対策協議会」を設立しました。

これまで協議会では、基礎データの収集、浸水要因の特定を行い、対策案の検討を進め、具体的な治



図-1 古川流域における治水対策概要図

水対策とそれぞれの役割に加え、令和7年度を完成とする整備スケジュールを確認したところです。

治水対策は、①秋田県が整備する猿田川樋門、②秋田市建設部が整備する排水機場Ⅰ、③秋田市上下水道局が整備する排水機場Ⅱの3つの事業を軸として進めることとしました(図-1)。

また、本市では災害への備えをより一層強化するため、排水能力が30m³/分のポンプ車1台と60m³/分のポンプ車1台の計2台を年度内に配備することとしております。

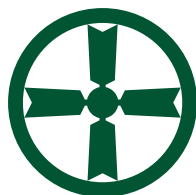
これにより柔軟な排水作業が期待されるほか、停電時においては電源の供給など幅広い活用が期待されます。

6. おわりに

古川の総合的な治水対策は、5回の協議会を経て、国・県・市の役割と整備スケジュールが決定しました。しかし治水対策事業は、スタート地点に立ったところであり、これから各機関の役割に沿って、調査や設計が進められ、令和7年度の完成を目指し工事が進められることとなります。

事業が進むにつれ、様々な課題が出てくるのが想定されますが、協議会では引き続き各機関に対するフォローアップを行い、3者で協力して円滑な事業の推進を図り、災害に強いまちづくりを1日も早く実現するため、全力で取り組んでまいります。

市章



矢留 (やどめ)

昭和3年6月に制定。的に「矢留」の形と、秋田市の「田」の字をあらわす。「矢留」とは旧秋田藩主佐竹氏の居城「久保田城」の別名。